

第5回「共生社会の実現に向けた生涯学習の充実のための推進協議会」記録

期日：令和3年2月9日（火）WEB会議

【成合委員より】本事業の整理・実践のイメージ

○ 実践の背景・根拠

「障害者の生涯学習の推進方策について」（報告）

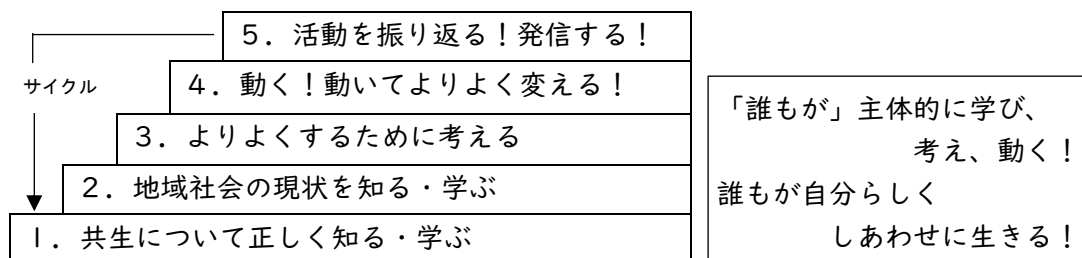
○ 地域共生社会について

制度・分野の「縦割り」や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民、多様な主体が「我が事」として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて「丸ごと」つながること
で、住民一人一人の暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会

○ 各ライフステージにおける学び

- ・ 各ライフステージにおいて、誰もが、その人らしくしあわせに生きることができているか
- ・ そのための出会いの場、学びの場、考える場、つながる場など、必要な「場」があるか
- ・ その場づくりのための社会的な仕組みはあるか
- ・ その仕組みはゴールに向かって機能しているか

○ 実践のプロセス



○ 実践1（案）

- ・ 調査（学びのニーズ把握、実践情報の収集・集約・可視化、課題分析）
- ・ 相談支援機関の機能強化（情報発信・収集、ICT活用）
- ・ 実践を推進するためのネットワーク構築・強化（仲間づくり・基盤づくり）

○ 実践2（案）

- ・ 当事者ニーズに基づく学習プログラムの開発・実施
 - 他機関・他分野協働による「場」の開発と実践（実践を通じた人材開発・資源開発）
- 既存の実践を基本に、実践の組み合わせによるプログラム開発・実践
- 双方向の学びの機会づくり（すべての人・組織が「学びの当事者」）
- 社会教育施設や生涯学習センターの機能強化
- ・ 障がい者を正しく理解するための学習の充実・強化

○ 課題

- ・ 実践に関わる経費（財源）… 事業終了後の地域展開、財源を作り出すための実践
- ・ 調整機能（コーディネート）… コーディネーターの必要性
- ・ 多様な機関の関わり

○ 事例として

- ・ 日向市における「福祉食堂」の実践紹介

◆ 中部地区 ◆

【出席者】 中井委員 (宮崎大学教育学部)
保田委員 (学校法人宮崎総合学院 宮崎福祉医療カレッジ)
深田委員 (県立特別支援学校PTA連絡協議会)
濱門委員 (有限会社サン・グロウ)
井上委員 (一般社団法人宮崎県手をつなぐ育成会)
山之内委員 (特定非営利活動法人障害者自立応援センターYAH! DO みやざき)
大山委員 (県社会福祉協議会)

【協議の記録】

「中部地区における多様な学びの機会の拡充方策」

- 前回の協議では、何か一つの活動を核として、その活動につながるアイデアを派生させていくのはどうか、活動を達成させるまでの過程で参加者が主体となって取り組んでいけるものがないのではないかという意見が出された。例えば、調理というアイデアが出されたが、調理は誰にでも関係する内容であり、自分のためだけでなく、誰かのためにする活動でもあるのでおもしろい。「誰かのために届ける」という目的をもたせて宅配弁当のような取組になると、ニーズを調査したり、広報の活動をしたり、そこに関係する活動を考えていけるのでよいのではないかと。
- どの程度の規模でこの活動を行っていくのか、県央全地域での展開を考えるのか、市町村を単位で考えていくのか、そのためにはまず内容を定めることが必要ではないか。誰でも参加可能なものという視点で考えると、先日のコンファレンスでもあった音楽はとてもよいと思う。
- 障がい者本人の主体性を尊重することが大事だと思う。誰でも参加できるものとするレクリエーション活動が中心になると思うが、アンケート結果からは、個人のスキルを上げたい、生活に役立つことを身に付けたいと感じていることが分かるし、先日のコンファレンスでも、自分を高めていきたいという気持ちが強いのではないかと感じたので、レクリエーション的な活動よりも、ちょっと壁のあるものがふさわしいのではないかと。その壁を、関わる人たちみんなで乗り越えていく経験ができればよいのではないかと。
- テーマをしっかりと持つべき。先ほどの調理で言えば、準備する、作る、教える、運ぶ、売る、食べるなどいろいろな役割があり、その関わりの中での新たな学び、つながりがあるのだろうと思う。いずれにしても、何のための活動であるのか、ビジョンを共有することが重要ではないか。
- 次年度に向けて、バーチャルスクールを作ろうと考えている。その中で、展示会をする、広場を作るといった計画を立てているので、その場を使って、絵画や俳句の展示会やコンテストをすることができるかもしれない。まずレクチャーから始めて、半年とか1年間とか期間をかけて展示会につなげていく、そんな場を提供することはできる。バーチャルスクールを皆さんに見ていただく機会があるとよい。
- コロナのことが気になっている。食べるといった、人が集まるという活動は控えた方がよいのではないかと。今日の会議のようにリモートで、自分が作ったものを見せ合うということはできるかもしれない。また、活動をしていくには、中心となる人の存在が必要であって、そこが大きな課題ではないか。参加者のことでは、特別支援学校高等部の3年生は、卒業後の事業所を決めることで精一杯なので、声をかけるのは難しいと思う。

- グループホームの世話をしている人から、自分で趣味や得意なことがある人はいいが、そうでない人もたくさんいると聞いた。せっかく生涯学習の場をつくっていこうという取組なので、グループホームを回っていくのもよいのではないか。ただ、誰がするのかという問題がある。
- 何のための活動なのかという点はとても重要だと思う。例えば、参加者の目的は音楽活動であっても、企画する側は何を目的として何を活動の中に組み込んでいくのかを別に考える必要がある。集まらないという現在の状況下では、バーチャルの取組もおもしろい。活動に向けた企画・準備の段階では活用できる。
- YAH!DO みやぎきのメンバーでこの事業について話をしているが、地域とつながっていきたい、友だち、知り合いを増やしていきたいという思いをもっている。ヘルパー、支援者だけに囲まれて暮らすのではなく、普段と違う人たちとつながれる場があるとよい。その場が楽しく、おもしろい場にできるかどうかが大変重要で、有識者、経験豊富な人がお膳立てをするのではなく、若い人たちが核となって進めていけるとよい。YAH!DO みやぎきは、若いメンバーもいるので、そういうことができる団体ではある。
- ライフカンパニー新富で何らかの役割を担うことはできると思う。知的障がいの方が多く、年齢層の幅が広いこともあるので、まず入口としては、楽しそう、参加してみたいと思えることが大事だと思っている。
- サン・グロウでは、これまでの取組として、写真のワークショップとコンテスト、動画制作（撮影と編集）とコンテスト、俳句や川柳のコンテストなどの経験がある。バーチャルの展開を考えると、さらに広がり生まれる。
- YAH!DO みやぎきとしては、楽しくなければ続かないと考えている。それぞれの主体性を大事にしておき、障がいのある人が支援を受けるだけでなく、支援を使いながらどう自己実現を果たしていくかを目指して様々な活動をしている。集まった人みんなが場づくりをしていくことを大事にしたい。事務局となって、連絡の調整などの面で協力できると思う。
- この委員でコラボできると大きなことができると思う。コロナでしばらく集まれなくても、その間はネット上で集まって、会えるのを楽しみにしながら活動していくのもよい。
- 一つのことだけに決めて取り組んでいくのではなく、まずやってみて、そこから意見を聞いて行きながらプログラムを組み立てていくこともできると思う。
- 大きな目的があっても、関係者がその一部分を担っていく方法もあるだろうし、完全リレー方式で進めていく方法もある。

◆ 南部地区 ◆

【出席者】 榎木田委員（県立都城きりしま支援学校校長）
福崎委員（県立小林こすもす支援学校主幹教諭）
野村委員（南九州大学人間発達学部子ども教育学科）
栗畑委員（特定非営利活動法人宮崎県精神福祉連合会）
壹岐委員（霧島おむすび自然学校）
外山委員（子どもと家族・関係者の集まり ポン太クラブ）

【協議の記録】

「南部地区における多様な学びの機会の拡充方策」

- 以前に特別支援学校で行っていたことがあるが、サポーター、ボランティア養成も含めて考えていけるとよい。
- 学生を外に出していけるとよい。障がいのある人と接するには一定の技術や知識が必要なこともあるが、（学生が）ボランティアとして参加していく中で研修会を設けるといったことができる。大学として、場や機会の設定はできる。
- 2月～6月の間に、市が行っている生涯学習講座なども含め、学びの支援に関する取組や関係する団体などの情報収集ができるとよい。
- 何かを始めないと障がいのある人たちとの関係づくりのきっかけができない。まず、「卓球バレー」をしてみてもどうか。それをきっかけに人材育成（サポーター養成）のことも始めていけるのではないか。
- 本校（特別支援学校）では、本年度コロナの影響でできなかった体育大会の在り方を見直しており、小学部・中学部と高等部とで分けて実施する方向で検討している。高等部では球技大会として行う話が出ており、そこで卓球バレーができるのではないかと考えている。その場に、卒業生を呼ぶことができないか、さらに大学と連携して学生と一緒に活動できないかということを考えている。ただし、来年度の行事についてはある程度固まっているので、再来年度以降に向けての話になる。
- 来年度の行事として組むのは無理にしても、まずつながりをつくるために、どこかの授業のコマを使って特別支援学校と大学が連携した取組を始めることはできる。
- 南九州大学では、次年度の市民向けの公開講座の申請をしている。5月からでき、水曜日の夕方頃からという想定で計画している。
- 県精神福祉連合会として行事を計画しようとする、会場を宮崎市にせざるを得ないが、圏域での活動、このメンバーであれば、すぐにでもできるのではないか。卓球バレーなら天候の影響も受けない。身体を動かす、汗をかくということは、その後の活力につなげるという意味でも最高のコンテンツだと思う。一緒に活動をして、それを入口として人材育成についての話につなげていくこともできるのではないか。三股町の障がい児・者連絡協議会でも、毎年卓球バレーの大会をしている。チームを作って大会に参加していくこともできる。
- 再来年度までは予算があっても、その後も継続させていくためには予算面が保障されている必要がある。会場は公的な施設を使えたとしても、せめて学生の交通費ぐらいは出したいし、講師を呼べば謝金も必要になる。卓球バレーはいい取組だと思うので、それを都城だけでなく小林や他の地区でも広げたいと考えたときにも、予算面は課題になると思う。

- 予算がなくてもできることを考えていく視点も必要。できる範囲でやっていって、あとからお金がついてくるということもある。
- 行政との接点という視点から、市が行っている講座に我々委員が協力をしていくこともできるとしている。各講座で求めている分野があると思うので、それぞれの委員の専門性を生かして協力していくことはできるのではないかな。
- この事業は県の事業として始まっているが、市町の理解が得られなければ展開は難しい。
- それぞれの職場で障がい理解に関すること、障がい者の将来に関することなどの職場内研修から始めていくのもよい。また、多職種が連携した研修会をするのもよい。講師となる人の専門性を高められるし、参加者相互のコミュニケーションにもつながる。
- 大学生がボランティアに出向いていくように、ポン太クラブに来ている中学生・高校生・大学生の子どもたちがボランティアとして出向いていくことができると思っている。ボランティアとして手伝いに行くことを目的とした活動もしたいと思っている。

◆ 北部地区 ◆

<p>【出席者】</p> <p>内勢委員 (九州保健福祉大学保健科学部)</p> <p>税田委員 (株式会社グローバル・クリーン)</p> <p>成合委員 (日向市地域福祉コーディネーター連絡会)</p> <p>猪股委員 (宮崎LD・発達障がい親の会 フレンド)</p> <p>金丸委員 (県肢体不自由児・者父母の会)</p>	<p>【協議の記録】</p> <p>「実践の整理・イメージ」(成合委員より)</p> <ul style="list-style-type: none">○ この事業は、障がいのある人を対象とした事業ではあるが、障がいがあってもなくても関係なく、自分らしく生きていく、よりよく生きるということが根底にある。学習プログラムをつくればよいというものではなく、もっと大事なところを考えておかないといけないのではないか。○ 学びの場を考えたときに、ニーズが先にあるのか、学びの場が先にあるのか、その両方の視点が必要であると思っている。○ それぞれのライフステージで学んでいくにあたって、何が壁になっているのか。そのアンケート調査を行って、本人の思い、家族の思いなどをまとめているが、間違いなく、情報をまとめたり、提供したり、思いをつなげていくような相談支援の機能は必要である。それを誰が担っていくのか。○ 学校を卒業した後の学びの場はどのくらい足りていないのか。障がい種によって異なるだろうし、もしかしたら障がいの有無は関係ないのかもしれない。人とつながれる場が十分にあるかという、自分で作れる人も、作れない人もいるので、社会の側(環境側)に問題があるのではないか。そのような問題を市民レベルで気付いていくのか、専門職で気付いていくのか、行政なのか、レベルはあると思うが、広げていくためには市民レベルで認知していく必要があるのではないか。○ 各地では、既に頑張っている人もいる。その人たちにもっと頑張ってもらおうということではない。足りないところをどう補っていくのか、活用できるところをどう活用していくのか、そういったことを考えていくのが委員の役割ではないか。○ 既に学びの場は多くあるのかもしれないが、配慮に欠けていたり、受け入れられないと断っていたりする状況もある。このような状況を変えていくことも必要。 <p>「北部地区における多様な学びの機会の拡充方策」</p> <ul style="list-style-type: none">○ 参加する側の立場ですっと考えている。生きていく上で、自分で相談できるようにならないと、いろいろな場面で行き詰まりが出てくることを考えると、「コミュニケーションを取る機会ができる学びの場づくり」ということが着地点でよいのではないかと考えた。自分が困ったときに相談できるようになる、親以外の人でも相談できる、SOSを出せるようになるといったことをねらいにしていくと捉えたい。何らかのプログラムを作って、そこに当てはめて成果を見せるということではナンセンスだと思っている。○ 「福祉食堂」の取組でも、引きこもりの子が絵を描くことで参加したことがあった。その子は、そこからつながりが生まれ、今は社会で自立した生活を送っている。その後も、困ったことがあったら声をかけてほしい、こちらも困ったら声をかけるから…と双方向のやり取りを続けた。また、この取組は、日常生活の延長と捉え、食材を自分たちでもらいに、企業へ出かけていた。そこでコミュニケーションを取ることになる。受け入れる企業側も、取組の趣旨を理解して協力してもらえるようになり、緩やかなネットワークが形成されていった。
---	---

- 「福祉食堂」は、平成 30 年度以降できていない。コロナの影響もあるが、継続させていくためにはコーディネーター役の存在が不可欠である。
- 先日のコンファレンスで MLAP の超参加型音楽活動の取組があったが、この「福祉食堂」の取組も同じところがあると思う。どんな参加の仕方でもよい、オール OK というのがよい。作業療法でも、活動を介したコミュニケーションを大事にしているので、それと同じ実践であると感じた。あとは、継続できる仕組みをどう作るかということが必要である。
- 東北ブロックコンファレンスでは、文科省が最終的には公民館活動に落とし込もうとしているのではないかと捉えたが、県が取り組もうとしていることとのずれはないのか。
- 社会教育の課題として、誰もが学べる場になっているかということがある。生涯学習センターで、障がいのある人が普通に出かけて学べる場になっているかどうかと言ったらそうではないのが現状ではないか。そういったことに声を上げていくことは必要だろう。一方で、私たち住民の側が取り組んでいくことも必要なのではないか。
- 新たなプログラムのこと、既存の取組の活用と両方が出ていて、さらに予算の確保の話もあるので、最終的な落としどころが分かりにくい。
- コーディネーター役をどうするかという課題も大きい。ただ、実践をしてみる、動いてみると見えてこない部分もどうしてもある。
- 既存の取組の延長線上に広げていくようなイメージを持っていた方がやりやすいだろう。既にならんでいる人たちが、どんな壁をもっているのか、やりにくさをもっているのか、どんな未来を描いているのかということは重要な視点ではないか。
- 障がいのある子を持つ親は、他の親に比べて、子どもが年齢を重ねるごとに大変なことが増えていくという点が異なる。子どもが学校を卒業すると顔見知りと離れてしまうが、そういうときに、地域のコミュニティ・センターのようなところで地域の人と関わる機会があれば、地域の人も子どもを知ってくれ、共感してくれるようになると思う。私は、親同士が共感できる場所がほしいと思って施設を作ったが、結局業務に追われてしまったので、事業所とは別に、コミュニティ・センターのような場所で集まれるとよい。ただ、障がいのある子を持つ親は時間が限られているので、できる時間でやっていくことが大事で、地域で少しずつできることを積み重ねていって、大きな活動につながれるとよい。今は、有償サークルという形での運営をしている。お金をいただいて、話し相手になったり、荷物を運んだり、掃除をしたりしているが、このような活動に対するニーズは多い。
- 先日、好きな時間に行って、好きな仕事・得意な仕事をするという企業がテレビで取り上げられていた。これは仕事としての例だが、好きな時間に出かけられる場があるとよいと思う。
- 「福祉食堂」をする中で、ある区長が「自分たちの活動は障がいのある人たちにもできる活動になっていたのか。自分たちの地域活動を考えていかないといけない。」と話したことがあった。当事者から学ぶという視点があるべきで、地域に働きかける取組ができればよい。
- 市の社会教育課にこの事業のことを話したときに、講座等で「誰でも参加できます」としているが、実際に参加があったときの対応については考えていかないといけないと話していた。
- これまでの話から、大きい取組、中程度の取組、小さい取組という段階があると思うので、各委員でそれぞれ継続して考えていきたい。